

【研究動向】

国際口承文芸学会第十五回大会報告

— 口承文芸研究はどこへ向かうのか —

間宮 史子

二〇〇九年六月二十一日～二十七日の期間、国際口承文芸学会 (International Society for Folk Narrative Research: 略称 ISFNR) の第十五回大会がギリシアのアテネで開催された。アテネアカデミーのギリシア民俗学研究センターの主催である。今回は学会創立五十周年記念大会を兼ねており、約五十カ国から三〇〇名を超える参加者、約三〇〇の研究発表がある盛大な大会であった。

大会初日の二十一日は受付、中日の二十四日は見学旅行(任意参加、別料金)、最終日二十七日はアテネ出発日に設定されており、学術プログラムは二十二、二十三、二十五、二十六の四日間で行われ、次の通りだった。

六月二十二日(月) 九時～十一時 朝の分科会(四ないし三発表)、十一時三十分～十三時三十分 昼の分科会(四ないし三発表、以下同じ)、十八時～十九時三十分 開会式、コンスタンチノス・デスポトポウロス(アテネアカデミー会員、前教育相)による基調講演「宇宙、歴史、人間意識における時空」

十九時三十分～二十時三十分 全体会一、二十時三十分～レセプション(この日、開会式以降はアテネ大学にて)。

六月二十三日(火) 九時～十一時 全体会二、十一時三十分～十三時三十分 昼の分科会、十六時三十分～十八時 午後の分科会(三発表、以下同じ)、十八時三十分～二十時三十分 晩の分科会(四ないし三発表、以下同じ)。

六月二十五日(木) 九時～十一時 全体会四、十一時三十分～十三時三十分 昼の分科会、十六時三十分～十八時 午後の分科会、十八時三十分～二十時三十分 晩の分科会。

六月二十六日(金) 九時～十一時 全体会六、七、十一時三十分～十三時三十分 昼の分科会、十四時三十分～十六時三十分 会員総会、十六時三十分～十八時 午後の分科会、十八時三十分～二十時三十分 晩の分科会、二十一時三十分～閉会の宴(アテネ大学にて)。

今大会のメインテーマは「時空を超える話—伝播と適応(Narratives across Space and Time: Transmissions and Adaptations)」で、六つのサブテーマ「口承文芸研究の歴史と未来」「神話、生態、環境描写」「移住社会—適応と記憶」「社会的戦略と集合的アイデンティティ」「ストーリーテリングとストーリーテラー」「現代メディアにおける口承文芸」が設けられた。会期中、全体会は四回行われ、七つの研究発表があった。発表者と発表題目は以下の通りである。

一、ヴィヴィアン・ラブリ(ケベック、カナダ)「現実世界

への理論としての十二のメルヒエンとその地図」

二、ミヒヤエル・メラクリス（アテネ、ギリシア）「時空間における話―伝播と適応。あるいは類話の最重要性」

三、ウルリヒ・マールツォルフ（ゲッティンゲン、ドイツ）「知的所有権と解釈能力―イランにおける口承文芸と口承文芸研究」

四、ステファノス・イメロス（アテネ、ギリシア）「現代ギリシアの民間伝説における古代の神々、英雄、重要な登場人物」

五、チャオ・ゲジン（北京、中国）「チベットとモンゴルにおけるケサル叙事詩の歌い手の範囲」

六、ギャリイ・アラン・ファイイン（エヴァンストン、アメリカ合衆国）「ジョークに何が起きた？ ジョーク文化の政治学」

七、ガブリエラ・キリアノヴァー（ブラチスラバ、スロバキア）「新しい話題と新しい仕事？ 研究活動における社会主義者とその戦略」

分科会は、前記六つのサブテーマに従い、さらに、伝説とまじないについての学会特別委員会のシンポジウム、口承文芸と芸術表現についてのパネルディスカッションが加わり、八〜十会場で行って進められた。テーマによっては、研究発表以外にパネルディスカッション形式をとる場合もあった。これほど分科会数が多いと、個人が聴くことができる研究発表はかなり限定される。以下に、テーマごとに開かれた分科会数を示し、私が聴き得た範囲で今大会の傾向をいくらか述べたいと思う。

・口承文芸研究の歴史と未来 十一

・神話、生態、環境描写 十

・移住社会―適応と記憶 六＋パネル一

・社会的戦略と集会的アイデンティティ 九

・ストーリーテリングとストーリーテラー 十八＋パネル二

・現代メディアにおける口承文芸 七＋パネル二

・シンポジウム―伝説 十

・シンポジウム―まじない、まじない師、まじなうこと 四＋

ラウンドテーブル一

・パネルディスカッション―口承文芸と芸術表現 一

最も多かったのは「ストーリーテリングとストーリーテラー」に関する分科会である。世界各地で「口承」の有りようが多様化している現代にあって、「口承」をになう語り手と語ることにそのものについて関心が集まっている。たとえば、オロール・ファンドウヴェンケル（ブリュッセル、ベルギー）「都市伝説は話の主語である伝達者のアイデンティティ、役割、意図について何を伝えられるか」、イシドール・レヴィン（ハンブルク、ドイツ）「心理学的口承文芸研究についての考察」、ハロルド・ネーマン（ララミー、アメリカ合衆国）「十七世紀フランスの女性ストーリーテラーオーノワ夫人」、グンティス・パカル（リガ、ラトビア）「現代ラトビアにおける語りの伝統保持の試み」などの発表があった。地理歴史学派の重鎮であるレヴィン氏の発表は、ドイツ語でされたこともあってあまり注目

されなかったが、研究史を辿りつつ口承文芸研究における「心理学的」考察の必要性と問題性を説き、傾聴に値した。

学会創立五十周年で設けられたテーマ「口承文芸研究の歴史と未来」についても、多くの研究発表があった。ルース・ボティックハイマー（ニューヨーク、アメリカ合衆国）「フォークロアの誕生と伝播の観念」、サダナ・ナイタニ（ニューデリー、インド）「時空間とルッツ・レリーヒ」、バーバラ・ヒラーズ（ハーバード、アメリカ合衆国）「東と西の話―アイルランドと日本における『こびとの贈り物』」、ラウリ・ハルヴィラハティ（ヘルシンキ、フィンランド）「二十世紀初頭ヨーロッパにおける民俗学的アプローチと研究の実際」、ドナルド・ハーゼ（デトロイト、アメリカ合衆国）「民話および昔話研究の組織化と未来」、ライナー・ヴェーゼ（ミュンヘン、ドイツ）「口承研究において疎かにされてきたジャンルについて」など。

「現代メディアにおける口承文芸」については、ヴィヴィアン・ラブリ（ケベック、カナダ）の「セレニティー（ATU707）、This Boy's Life（ATU590）、スター・ウォーズ（ラクルシエール305A）、ソラリス（ATU652）―映画にアールネイトムソン＝ウターの話を拡張してあてはめることの可能性と含意」がある意味興味深かった。「話型」は確かに口承文芸以外のジャンルにもあてはまるし、研究対象の拡張ととらえられなくもない。

「伝説シンポジウム」の分科会も多くもたれた。伝説研究は、

世界の口承文芸研究において現在優勢であるといえるだろう。イーネス・ケラー＝ツェルヒ（ゲッティンゲン、ドイツ）「紀行と伝説上の地形」、マリア・イーネス・パイエロ（ブエノスアイレス、アルゼンチン）「淑女の幽霊と黒い悪魔―アルゼンチンとエストニアの口承文芸における記憶の色」といった報告があった。

日本人による研究発表は四本。「神話、生態、環境描写」分科会で小林文彦（エルサレム、イスラエル）「日本昔話の動物嫁は従順な女性か、野心的な女性か―動物嫁譚における動物嫁の本性について」、「ストーリーテリングとストーリーテラー」分科会で櫻井美紀「日本神話と日本における現代のストーリーテリング」、また、「社会的戦略と集合的アイデンティティ」分科会において、金城ハウプトマン朱美（ゲッティンゲン、ドイツ）「日本の現代伝説」と間宮史子「日本昔話における異界の時空」が行われた。発表時間が重ならず、日本人発表者はお互いに聴き合うことができた。各発表とも興味をもって聴いてくれる聴衆に恵まれ、発表後に質問やコメントを得た。

二十六日の会員総会では、まず、名誉会員の推薦と承認が行なわれ、ロルフ・ヴィルヘルム・ブレードニヒ（ドイツ）、ガリット・ハサン＝ローケム（イスラエル）など十名が名誉会員となった。

また、第五代会長ユーロ・ヴァルク（エストニア）、南米地区副会長マヌエル・ダンネマン（チリ）、運営委員ガブリエラ・

キリアノヴァー（スロバキア）、会計ウルフ・バルメンフェルト（スウェーデン）が勇退を表明したため、各役員の改選が行われた。他の役員は留任し、新役員は次のように決まった。

会長 ウルリヒ・マールツォルフ（ドイツ）

副会長 ユーロ・ヴァルク（エストニア）、アフリカ地区―エゼキエル・アレンビ（ケニア）、北米地区及び会員委員会委員長―クリスティーナ・バツキレガ（アメリカ合衆国）、アジア地区―メリー・バグヘリ（イラン）、ヨーロッパ地区―ラウリ・ハルヴィラハティ（フィンランド）、南米地区―マリア・イネス・パイエロ（アルゼンチン）

運営委員 ドナルド・ハーゼ（アメリカ合衆国）、フミコ・マミヤ（日本）、サダナ・ナイタニ（インド）

会計 マリレーナ・パバクリストフォロウ（ギリシア）

次回の大会開催地としてビリニユス（リトアニア）が立候補し、第十六回大会は当地で二〇一三年六月に開催されることに決定した。中間大会はクワーハーティーとシロン（インド）で二〇一一年（一月ないし二月予定）に開かれることになった。

学会創立五十周年の節目にあたり、過去最多の参加者が集った今回のアテネ大会。ギリシア民俗学研究センターの大会運営は滞りなかった。強いて難をあげれば、会場がアテネ大学の周囲とはいえ五、六か所に散在していたため、厳しい暑さの中、会場間の移動に多少骨が折れたことである。学会五十年を回顧する記念展示もあったのだが、分科会会場とは離れた別会場の

ため、あまり目につかず、私が訪れた時には誰も見学していなかった。

国際口承文芸学会での使用言語は、英語が主になって久しいが、今回は特にそれが顕著だった。ちなみに、学会会則には公用語として、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、スペイン語があげられている。フランス語による研究発表はかなり前から見られなくなったが、ドイツ語の発表は一部とはいえ、まだいくらかあった。今大会のドイツ語発表は五本（内訳は、ドイツ人一、ラトビア人二、スロバキア人二、日本人二）のみで、それ以外はすべて英語だった。英語以外の言語を操る研究者は決して少なくないが、世界共通語としての英語一辺倒の流れには逆らえないようである。

残念だったのは、今回は日本人参加者が少なかったこと。本学会からは櫻井氏と私だけだった。開催時期や場所、使用言語の問題（これはドイツ語で発表してきた私にも切実な問題である）もあろうが、出ていって発表していかない限り、遠い「極東」に位置する日本の口承文芸とその研究については伝わらないあと強く思う。日本人研究者は今後、何をどのように発信していくべきなのだろうかと、アテネの真つ青な空を仰ぎつつ考えてしまった次第である。

（まみや・ふみこ／白百合女子大学）